

『青鞥』の新しい女たちと馬場孤蝶

岩田ななつ

私の専門は日本近代文学で、特に女性文学雑誌『青鞥』(1911~1916年)の文学を研究している。『青鞥』は、平塚らいてう(1886~1971)の有名な創刊の辞「元始、女性は太陽であつた」をはじめとして、近代の自我に目覚めた若い女性たちが、文学を通して自己実現を目指そうとした雑誌として知られている。

『青鞥』といえば、時代の先端をゆく、おしゃれで魅力的な、「新しい女の集団」のイメージが強いが、『青鞥』の周辺には、「新しい女が大好き！」と公言してはばからない、『青鞥』を応援する「新しい男」たちも、きら星のごとく集まっていた。

『青鞥』の女性たちと同世代(少し年上も含む)では、生田長江、大杉栄、辻潤、富本憲吉、阿部次郎、岩野泡鳴、武者小路実篤、高村光太郎、岡本一平、など。年輩者には、森鷗外、夏目漱石、そして明治学院卒業(1891年)の馬場孤蝶もいる。

馬場孤蝶(1869~1940)は、明治学院で島崎藤村、戸川秋骨と同級生で、藤村の自伝的小説『春』(1908年)、『桜の実の熟する時』(1919年)に、足立弓夫として登場し、さらには樋口一葉の文学を愛したことでも有名な、英文学者、随筆家である。

『青鞥』の女性たちからみれば、父親の世代に近い馬場孤蝶が、どのように『青鞥』と関わったのか、平塚らいてうの自伝『元始、女性は太陽であつた』(大月書店、1971年)や、山川菊栄(1890~1980)の文章などから紹介してみる。

そもその出会いは、『青鞥』前史と位置付けられる、閨秀文学会である。閨秀文学会は、

1907年6月に、ユニヴァーサリスト教会付属の成美高等英語女学校に生田長江の肝入りで、女性作家を生み出すことを目的につくられた文学研究会で、講師は与謝野晶子(源氏物語の講義)や馬場孤蝶(欧州近代小説の梗概)、戸川秋骨、森田草平、など。当時、らいてうは日本女子大学校を卒業した後で、成美には英語を学ぶために通っていたが、誘われるまま授業後の閨秀文学会にも参加した。らいてうが初めて小説を書いて回覧雑誌にして発表したのも、この閨秀文学会でのことだった。

ところが、閨秀文学会は、らいてうと森田草平の心中未遂事件(1908年3月、煤煙事件)によって頓挫する。当時の社会に衝撃を与えた煤煙事件の後始末を任されたのは、森田草平の師である夏目漱石(1867-1916)と、馬場孤蝶だった。両先生の一致した解決策として、平塚家に出された案は「結婚すること」で、森田草平との結婚なんて考えていなかったらいてうは、呆れ返ってしまった。しかし、そののちも馬場孤蝶は閨秀文学会を惜しんで、自宅であらいてうや山川菊栄、岡本かの子たちに文学を教える。

らいてうの自伝には、「馬場先生は、座談の名人とでもいうような人で、それからそれへとお話が發展して、つきません」「一葉や緑雨の話、文壇雑話、大陸文学の梗概」などを話してくれ、さらに「馬場先生はそのころ四十代くらい、中柄の痩せがたでしたが、細おもての貴公子然とした立派な顔立ちの美男子で、見るからに当時の新知識者らしい、ハイカラな風采の持主でした」と、好意的に馬場孤蝶を記している。

1911年9月の『青鞥』創刊には、直接関わることはなかった馬場孤蝶ではあるが、1913年2月に青鞥社第一回公開講演会が開かれたときには、長江に頼まれ孤蝶も「婦人のために」との論題で講演し、それが『青鞥』3月

号に掲載されている。

孤蝶は、「将来の御婦人に対しては私は段々此の世の中を変へることに御尽力になることを希望する」、「もう少し婦人が何か職業を得ること、婦人ばかりで出来上つた労働者のオルガニゼーションのやうなものを造ると云ふ方面にも女の方々が尽力されんことを希望する」と、新しい考えを述べている。

さらに1915年3月衆議院議員選挙に、雑誌『反響』（森田草平、生田長江編集）の文学者たちの推薦で立候補したとき（落選）、公約に婦人参政権の獲得も上げている。もちろん立候補にあたっての応援者には、らいてうや伊藤野枝など『青鞥』の女性たちも名を連ねた。

馬場孤蝶は、樋口一葉（1872～1896）と親しく交わり、その死後も『一葉全集』（博文館、1912年）を編集し、一葉とその文学を語り続けたことでよく知られているが、一葉の時代から約10年後には閨秀文学会で女性たちに文学を講じ、さらに『青鞥』の女性たちの応援をし、らいてうや山川菊栄に慕われ続けていたことも覚えておきたい。

（いわた ななつ 協力研究員・本学非常勤講師）

